

秋の陣 その7

大学時代には、夏休みになると、様々な旅行を企て、友人たちと印象深い日々を送ることができた。

1年の夏休みには、青森の五所川原に行き、津軽鉄道に乗って小泊村を見に行った。太宰治の「津軽」と云う小説を読んだので企てだった。斜陽館の大きな土間の入り口や、十三湖の赤い水もとても印象的だったが、小泊の港でイカ焼きを食べ、「津軽」の主人公が小さい時の奉公人であったタケという女性と会うことができた小泊小学校に行ったことは、小説の追体験としてとても印象深いものだった。

サークルのゼミで、志賀高原に行ったり、富士五湖のほとりで一週間過ごしたり、中央本線の小淵沢から清里に学習合宿に行ったり、京都の友人のところまで10日間過ごしたりと、あちこち行くことができたのは、予算もさることから行こうというある日の決断に寄っていたことが重要な決め手となったのは言うまでもない。

京都では、友人の部屋の掃除をして、ビールビンや酒瓶を売りに行き、そのお金でパチンコをして、その日の夕食代を稼いだとか、学習合宿では、前歯の差し歯の取れた女子学生と仏文科の教授と朝まで話をし、その日のハイキングを病休と称して休んだり、富士五湖では、ボートが転覆しそうになって驚いたりとか、今考えれば冷や汗ものもののエピソードに事欠かないものだった。

大学のゼミサークルの部屋で、小説の構成のまずさを指摘された記憶とか、夏の集中合同講義で何人もの同級生にやり込められた記憶とかも、ここでは書けない様々なエピソードを含め、危険極まりない時間を過ごしてきた記念碑のようなものが、一生の付き合いとして持っていかなければならないものとしてあることも事実である。

その後に行った、フランスのパリ、ルーブル美術館のミケランジェロの「奴隸」の彫刻や、スペインのマドリード近代美術館のピカソ「ゲルニカ」の絵のわきに立っていた自動小銃を持った兵士の冷酷な顔つき、桂林のホテルで食べた竜虎料理、台湾の故宮博物館で見た白菜に泊まるギリギリス、鳥取砂丘のラクダの涎も、岡山城脇の夢二記念館のたたずまいも、名古屋城の天守閣も、大阪御堂筋の途切れることのない人の多さも、初めての旅での弘前城下の満開の桜吹雪とおどろおどろしい見世物小屋の記憶の強烈さには、比較することもないのだけれど、少し見劣りするものなのだろう。

旅を重ねて、世界を見て歩く時間は、これからの君たちの心のよりどころとなるであろう。世界を見て歩け。何でも見てやろう。

